

魚類の分類学的研究: 30 年を振り返って

本村浩之

鹿児島大学総合研究博物館

演者が 1996 年の学部 4 年生の時に初めて魚類学に触れてから、今年で 30 年を迎える。本講演ではこの 30 年を振り返って、これまでに行ってきた魚類の分類学に関係する以下の 3 つの主要な研究活動を紹介したい。

魚類の分類学的研究: ツバメコノシロ科とフサカサゴ科を中心にインド・太平洋域に分布する魚類の分類学的研究を行っている。ツバメコノシロ科魚類の研究は主に学生時代に行ったもので、世界 15 カ国の研究機関に所蔵されている全 89 名義種のタイプ標本の調査、および延べ 30 カ国における一般標本の採集・調査に基づく。結果として、57 名義種を新参異名と認め、32 名義種を有効種として再記載するとともに、1 新属、12 新種、1 新亜種の記載を行った。記載した新種の多くが隠蔽種であったが、中にはボルネオの 1 河川にのみ生息する全長 70 cm に達する新種や、浅海域に生息する本科魚類のなかでも特異的にフィリピンやバヌアツの水深 300 m 以深の深海に生息する新種など特筆すべき発見もあった。分類学的研究と並行して、本科魚類に特有な胸鰭遊離軟条を用いた摂餌行動の属間の相違、体色と体サイズに相関関係が存在すること、胸鰭遊離軟条に味蕾が分布すること、オーストラリアの固有種が性転換することなども初めて明らかにした。学位取得後はフサカサゴ科とその近縁科の研究を中心に進めた。ヒレナガカサゴ科魚類の分類学的再検討では 6 新種を含む 2 属 18 種を有効種として認め、南半球における本科魚類の種分化は、氷河期と間氷期の繰り返しによるものであることを指摘した。これまでに魚類に関する 1,052 論文、94 書籍を出版し、その中には 3 新属、5 新属新種、209 新種、2 新亜種の記載と、198 種の新標準名提唱も含まれる。

上記と並行して、東南アジアの魚類相に関する研究も進めている。ASEAN 諸国の魚類研究者と共同調査を行い、これまでにフィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、インドネシアなどの各国・地域から魚類のフィールドガイドを出版し、PDF による無料公開および冊子体の無料配布を行ってきた。特にフィリピンのパナイ島における調査は 7 年間継続し、現地のフィリピン大学に魚類コレクションを創設した。カンボジアでは、低緯度に位置する淡水域としては世界最大のトンレサップ湖の魚類相を 10 年以上調査しており、同期間中に同湖に固有な初めての分類群として新亜種を記載し、また純淡水で再生産しているネズップ科の新属新種を記載した。従来、同湖には 500 種の魚が生息すると考えられてきたが、本研究によって実際は 200 種程度であることが明らかになった。現在はマレーシアの魚類相調査を集中的に実施している。

生物地理学的研究: 鹿児島県は旧北区と東洋区の 2 つの生物地理区にまたがって南北約 600 km に広がっており、605 の島嶼を有する。また、黒潮の影響を受けない県本土北西部海域や水深 230 m に達する半閉鎖的な鹿児島湾など特異的な水域もあり、鹿児島県の各島嶼・海域における魚類相の解明は南日本の魚類相を理解する上でも重要である。鹿児島県を中心に南日本と琉球列島における大規模で緻密な調査を実施した結果、海洋生物における新たな分布の境界線「大隅線」を見出し、それは「屋久島」と「硫黄島+竹島+種子島」の間に位置することを明らかにした。

日本産魚類全種リストの作成: 日本産魚類の分類・多様性に関わる研究の歴史は古く、1913 年には日本産魚類を初めて体系的にまとめた「Catalog of the fishes of Japan」が出版さ

れ、1,230種が記録された。その後、日本産魚類の記録は増え続け、2013年に出版された「日本産魚類検索 全種の同定 第3版（以降、魚検）」では4,210種の日本産魚類が掲載された。魚類の分類学を含む基礎的研究は国内外で精力的に行われており、新種記載や学名の変更、新しい分布記録が毎日のように報告されている。「魚検」で記録された4,210種のうち、現在ではその5分の1の学名が変わっており、さらに600種以上が追加されている。そのため、国内外の様々な雑誌で発表され日々変わる学名や分布情報を網羅的に追跡するのは困難な状況であった。そこで、誰もが一目見て日本産魚類の最新の名称や分布を把握できるように「日本産魚類全種目録（以降、全種目録）」を作成した。「全種目録」は日本産魚類全種の目名、科名、種名、および分布記録で構成され、「魚検」以降に出版された魚類学関係の文献も網羅的に掲載されている。2020年に紙媒体の「全種目録（4,554種）」を出版し、同時にエクセル版「全種目録（ver. 1）」を公開した。これ以降「全種目録」を毎日更新し、数か月ごとに更新エクセル版を公開している〔現在はver. 38（4,852種）が最新版〕。省庁や大学、博物館、水族館、研究所、環境アセス会社、個人などでエクセル版「全種目録」が利活用されている。本講演では「全種目録」作成の過程から、掲載種や学名、文献情報の取捨選択方法などの基準について紹介するとともに、全種目録の意義や今後の展望を述べたい。